

焦点が不明確であつたりして、現状把握さえも十分に出来ず、本論に値するものにあらなかつた事を、大変痛く思つている。

群馬県富岡市の地形と土地利用

吉田 寿子

この報告は、調査地として群馬県富岡市を選び、この地域を地形と土地利用の点から考察し、その上で地域の性格を把握することを最終目的としたものである。「土地利用」の考察にあつては、調査地が養蚕県群馬の中でも特に養蚕が盛んな地であるので、桑園(→養蚕)を中心とした農業土地利用の考察に重点をおいた。

富岡市は群馬県の北西部、東京から直線距離で100km余りのところに位置している。長野県と群馬県をむすぶ重要な通路の一つ、中仙道の裏街道筋にあり、古くはここを通過して流入する文明の恩恵を受けていた土地である。

関東山地の北縁部にあり、地形は鑛川の河岸段丘を中心として、丘陵地から山地を含むが、市の中心部は河岸段丘上にある。このため土地の性質は、一般に高燥となっている。市の産業構成をみると、農業人口が50%をこえ農業が中心となつてはいるが、最近では金属機械類の生産を行う工場の進出が目立ち、従来からある製糸業に加え、工業のweightも高くなつてきている。

地形は特に段丘地帯の地形分類を行つたが、段丘面は上、中、下位の三面に分けられた。この分類は、結果的には今迄この地域について行われた土地分類調査(地形分類)などの研究成果と変るところはなかつた。この段丘面のうち、上位、中位面には関東ロームが被覆している。ロームは板鼻かつ色パミスを下層に上層ロームと、その下には中部ロームと思われるものと認められた。post-loam 段丘面である下位面には微地形が認められ、旧自然堤防や砂礫堆などの相対的に高く、表層が粗粒質な部分と、旧河道、旧後背湿地の部分が区別できた。これらのわずかな地形の違いは、土地利用に反映され、相対的に低い部分は水田に利用されていることが多い。

土地利用からみると、農業土地利用が土地利用の首位を占める。耕地のうちでは水田は29%とかなり少なく、畑地利用、特にその中で桑園利用の割合(総耕地の37%)が高いのが特徴である。桑の栽培を基礎においた養蚕業はこの地域の農業の中心になつており、農家経済上で非常に重要な位置を占めている。

この地域の養蚕業は非常に古い伝統を持ち、すでに江戸時代中期より農業

の中心になつている。昭和初期がその最盛期であり、その時の規模はほとんども及ばないが、今日でも依然として農業の中核として、盛んである。昭和33、34年頃の養蚕大不況においても、あまり影響はうけず、桑園面積はほとんど減少していないというのが特徴で、現在もなお、他地域に比して大規模な養蚕が展開されている。

養蚕業は依然農業の中心であるが、農業は以前に比べ多角化している。酪農養鶏が普及し、蔬菜や花卉栽培、高等園芸なども導入されている。これらは養蚕不況が契機となつて入つてきたものであり、養蚕からの収入の減少を補う性格をもつていた。ほとんどすべてが、東京の市場を対象としており、年々発展している。しかし現在のところは、これらの部門は、従来から生産性の低かつた畑の有効的利用という段階にある。労働面において養蚕との競合がおこる場合にも、ほとんどが養蚕の優位に終つている。

このように、全国的には著しい衰退の契機となつた養蚕大不況以後も、養蚕がおとろえていないのは次のような理由が考えられた。

- ① 古代から養蚕業の先進地域として存在し、しかも、養蚕業は江戸中期以降、常に農業の中心を占めていたという歴史性、伝統性が、不況に際しても、桑に対する執着となつてあらわれ、容易に他の部門への転換の動きを生まなかつたこと。
- ② 伝統的養蚕先進地帯として、技術が進んでおり、人手の要する養蚕業の存続に対する労力面からの制約は、省力養蚕の技術（稚蚕共同飼育、糸桑育など）の普及で、いち早く対応できたこと。
- ③ 労働生産性を高め、伝統に支えられた有利性をもつ養蚕は、他の部門との競合において、現在までは優位に立つことが出来たことなど。

地域の自然と人文の現状分析によつて、この地域には次のような性格がみとめられた。

- ① 土地の乏水的性格
- ② 養蚕中心の農業を維持してゆこうとする性格
- ③ 東京の外縁として、主体的な農業が行われる地域で、最近では東京の近郊農村的性格とあらわれつつある。

さらにはこれらの性格のほかは、長野との位置関係が生む、特徴的な地域の性格とみとめることが出来る。

地域性の把握ということを目指したものであるが、現状分析からうかび上つた、地域性を十分明確に握みえられたかどうか、はなはだ自信がない。もちろん

んこれが完全なものであるとは思っていないので、もし今後またこの地域を研究する機会をよつたら、他の地域の比較の上から、地域性というものを考察しなおしてみたいと思う。

榛名火山東南麓の地形と土地利用

類地 蓉子

調査地域の地形は主として、第四紀の火山活動によつて形成された榛名火山の東南部の火山体斜面である。しかしこの火山体斜面は形成時期のちがひから新、旧二つの地形地域に区分される。各々の地域の主要地形面が旧期火山体浸蝕谷壁急斜面、新期火山体緩斜面となつていていることからわかる様に新期火山体に比し旧期火山体の起伏量が大きいこと、旧期火山体には剝離ローム層中の上部ローム層（立川ロームに対比）、中部ローム層（武蔵野ロームに対比）が堆積しているのに対し、新期火山体には上部ローム層しかのつていないことなど、それらの明析程度の差異、火山灰層の被覆関係は明らかに二地域の火山景面形成の時期の相違を確認させ、地形区分の根拠となつていゝる。それぞれの火山景面は両火山体緩斜面においてその存続を許しているが、それらの構成物質は時代は異なるにしてもいずれも榛名火山起源の泥流及び浮石流等の火山性堆積物であり、表層を薄くローム層が被覆しているのである。

これらの火山体斜面の他に、より下流部には台地地形地域と、以上3つの地形地域の境となつていゝる、烏川、白川、井野川等の低地、

地形、地域が存在する。これらの地形は水成堆積物よりなる。台地面は台地地形地域の主要な面であるが、基盤が火山性堆積物と思われる特殊な台地である。表層部に砂質の水成堆積物をのせていゝる。又微高地面をその中に分布させ、その部分では上部ローム層の二次堆積物が主として堆積している。低地地形地域で特色ある地形は、白川の下流部にある現堆積性扇状地面と井野川の浸蝕谷床面である。白川の上流部は火山体斜面と河床との比高が10%以上との浸蝕谷を刻んでいゝるのに対し下流部ではむしろ河床面の方が周囲よりも高く存つていゝる。又井野川はかつての自身の堆積物をあらたに下刻して4~5mの浸蝕谷壁を形成していゝる。

土地利用はおよそ100mから650mまでの山麓部は耕地、650mから1400mまでの山頂部は森林が卓越していゝる。耕地としての土地利用は畑地、桑園が約5%を占め、主として新、旧火山体緩斜面に分布していゝる。